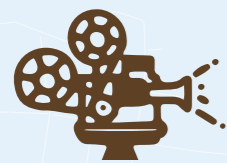


うるくの コネタ

ローカルなコネタ、
歴史ネタなどをご紹介



【戦後の復興を担う人々が娯楽を楽しんだ】

戦後この一帯は米軍需物資や民間物資の荷役作業のための特殊行政区(通称みなと村)として多くの作業隊とその家族が住んでいました。遠くはヤンバルから移り住む人もいたといえます。そんな時代に祖父の清助さんが仲間と共同で土地を買い、最初に始めたのは相撲場。それから芝居小屋として営業を始めました。その後、清助さんの息子・政英さんが映画技師の免許を取得し映画上映がスタートしたそうです。沖繩芝居の巡業の合間に石原裕次郎や小林旭などの映画が上映されました。「大変な時代だから軍作業も生活も大変だったと思います。でもそんな中でも少しずつ芝居や映画を楽しめるようになってたんじゃないでしょうか。」(博さん) ※1969年時の常設館映画娯楽税資料によると観客収容人数は495人(立見205、座席290)



左: 当時を知る宮城利勝さんが描いてくれた劇場の様子。博さん記憶の配置図と若干異なるものの当時の雰囲気が伝わってくる。中央: 劇場通りへの入り口。右: 2023年現在の、瓦屋根の家はそのまま残っている

【周辺にはゆーふるやー、商店などがあり賑わっていた】

劇場のすぐそばにはゆーふるやー(銭湯)があったそうです。「高い煙突があって、芝居や映画を見てお風呂に入る人も多かったと思います。役者さんも芝居の後に入っていましたよ。銭湯はその後「ペリー美容室」になりました。」劇場の周辺には多くの商店があり、大変賑わっていたそう。「この辺は「ペリー区」だったのでペリーと名の付くお店が結構ありました。」また、現在の山下南交差点付近には市場のようなものがあり「小さいお店が30近くはあったと思います。さしみ屋とんぶら屋によく買いに行かされたのを覚えています。」戦後の復興に向けて賑わう地域の様子が目に浮かんできます。



左: 劇場跡地。2011年頃のペリー保育園(提供: 高良広理さん) 中央: 2023年現在のペリー保育園 右: ペリー保育園 園長の賀数博さん

シリーズ『うるくにあった映画館』その2

山下町に映画館があったってよ〜! (ペリー劇場)

戦後のまだまだ娯楽の少ない時代うるくにあった映画館(5つ)をシリーズでご紹介しています。

戦後すぐ、山下町は「ペリー区」と呼ばれていましたが、そこに『ペリー劇場』という映画館がありました。その跡地は現在『ペリー保育園』となっており、『ペリー劇場』の初代館主のお孫さんが『ペリー保育園』園長の賀数博さんにお話を伺うことができました。



提供: 上原隆昭さん(カメラのたかちよ)

【スピーカーで宣伝。役者が泊まる部屋もあった】

幼稚園生だったという博さんが当時の劇場の様子を教えてくださいました。「劇場はコンクリート瓦屋根で屋根の上にスピーカーがあって、昼12時ごろからその日に上映する映画の音楽を流して「今日はペリーで●●映画を上映します」という感じで宣伝していました。芝居の宣伝は夕方6時から小さい車にスピーカーを積んで役者さんがまわって宣伝していました。」劇場内部の配置を描いてくださりながら「劇場の裏に水タンクがあって役者さんがそこでドーラン(舞台化粧)を落とすんですが、その匂いは今でも覚えています。まだ幼かったので、何で顔を洗っているんだろうと思っていました笑」舞台(スクリーン)裏には役者さんが寝泊りする部屋もあったそうです。当時『ペリー劇場』の通り入り口には宣伝を兼ねた門のようなものがあり「そうそう、こういう門がありました。ポスターが手書きで長男が描いていたと思います。」

【1970年代にアパート・保育園の複合ビルに】

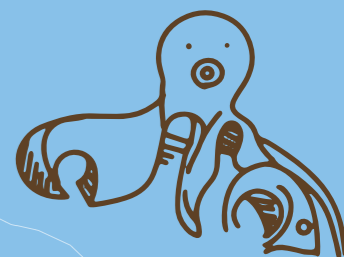
1960年代半ば、政英さんの奥様が建物の一部を使って保育園を始めました。きっかけは劇場の近くで起きた子どもの交通事故で「地域の子は地域で育てたい」という想いからだったそうです。その後、アパート・保育園の複合ビルに建替えられました。このビルには劇場の外壁の一部などがそのまま使われていましたが、この建物も老朽化により現在の建物に建替えられました。今も『ペリー保育園』には子どもたちが元気に通っています。



初代館主: 賀数清助さん 2代目館主: 政英さん



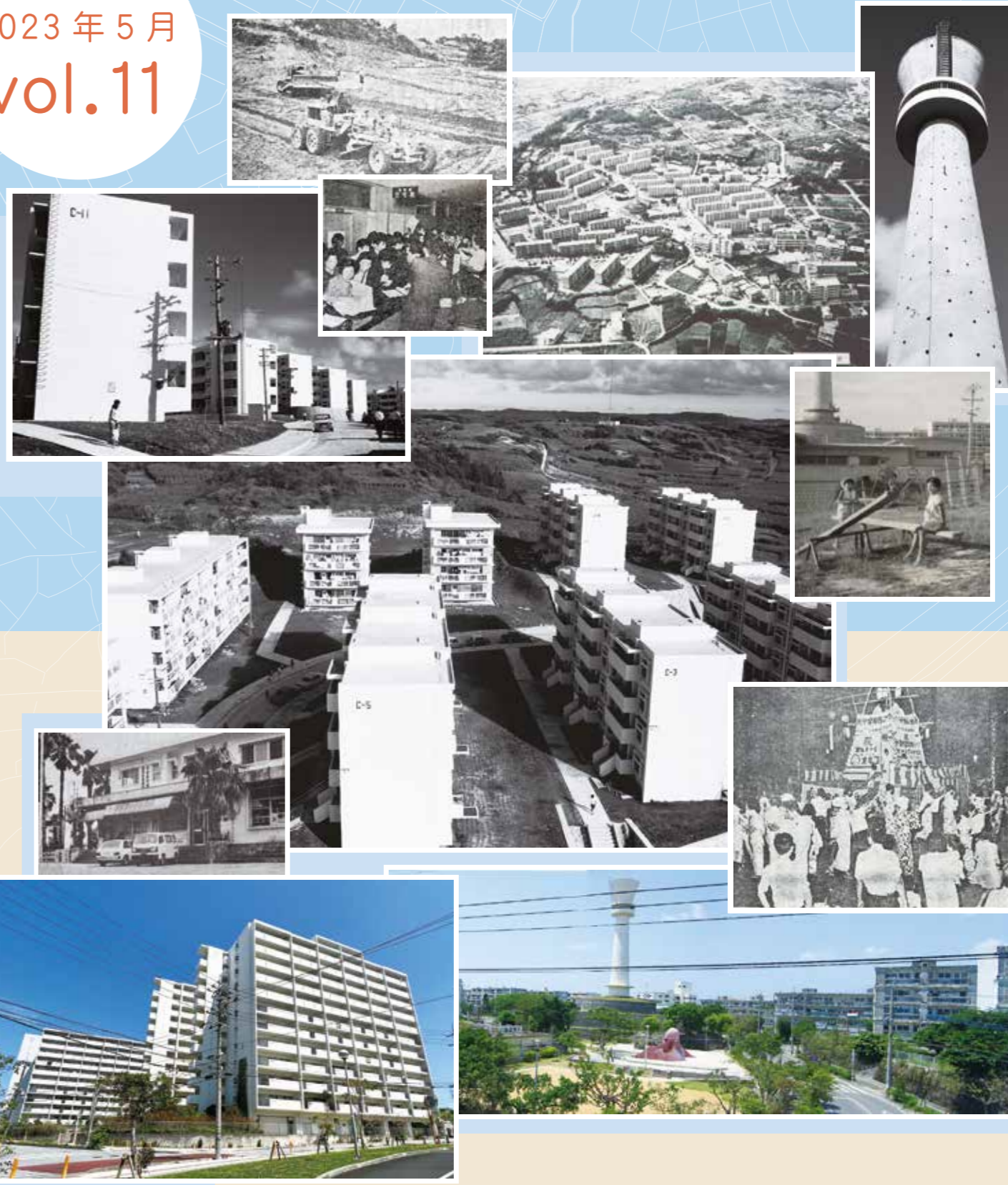
URUKU LOCAL PRESS



うるくローカルプレス

うるくのローカルな情報をお届け!

2023年5月
vol.11



無料 TAKE FREE



編集後記

地域の歴史を残していきましょう!

今回は『宇栄原団地』のスペシャル特集。webでは以前から連載記事を掲載していましたが、建替工事が進み、新しく生まれ変わっていくこのタイミングに、宇栄原団地が戦後のうるく地域の発展にとって重要な存在だったということを改めて残しておきたい...という想いで企画しました。何もなかっ

たあの場所で、団地ができ、人口が増え、小祿の中心地として賑わっていった様子を、この誌面を通して感じていただければ嬉しいです。【宇栄原団地の昔の写真やエピソードを募集しています!ぜひ編集部までお寄せください!】



うるくローカルプレスの「小祿(うるく)」は、【小祿、宇小祿、宇栄原、具志、高良、田原、金城あたり】としています。

URUKU LOCAL PRESS
うるくローカルプレス

WEBサイトが出来ました!

WEBサイト
誌面では伝えきれない情報が満載!
<https://uruku.daikyo-k.net>



お問合せ&窓口

✉ uruku@daikyo-k.net

各SNSからのメッセージもOK!



Facebook



twitter



instagram



youtube

うるくの情報発信局
『うるくローカルプレス』

編集部: 那覇市金城5-13-5 2F
運営: 大鏡建設株式会社(那覇市宇小祿912-1)

人とまのちの、
未来をつくる。

大鏡建設
DAIKYO CONSTRUCTION



宇栄原団地ヒストリー

Uebaru Public Housing History

宇栄原団地ヒストリー

小祿の中心地として賑わった『マンモス団地』

1963年(昭和38)から1966年(昭和41)にかけて建設された宇栄原団地(宇栄原市営住宅)。本土復帰前のアメリカ世の時代に、何も無い吹切原(フッチリバル)という原っぱを切り開き建設され、収容人数4,000人規模の『マンモス団地』となり、団地周辺も人口が増え、小祿の中心地として賑わっていきました。築50年以上の経過に伴い、2008年(平成20)からは建替工事が進んでいます。近代的な団地へと生まれ変わりつつある宇栄原団地の歴史を振り返ります。

小祿の中心地となり、『一つのまち』に

団地の建設をきっかけに、団地周辺の人口も増え、1974年に小祿支所が高良から現在の場所に新築移転。小祿の中心地として賑わっていきました。



提供:那覇市歴史博物館

子育て世代が多く、小祿地域の子どもの数が急増

共働きの子育て世代が多く、団地内には保育園が2カ所ありました。団地内の広場での運動会では子どもとその父母・祖父母が足を運び大賑わいだったそう。何もなかった場所に4,000人規模の集落が誕生したことで、小祿地域の子どもの数が急増。団地周辺にもアパートが建ち人口がさらに増加し、1972年に宇栄原小学校ができました。



左:建設中と思われる宇栄原保育所 1965年10月(沖縄県公文書館所蔵) 右:1970年前後(写真撮影:新崎善晴氏/親族提供)

『タコ公園』が子どもたちの遊び場

給水塔(バル給)のふもとには中央児童遊園:通称『タコ公園』があり子どもたちの遊び場でした。(現在の場所は宇栄原みらいこども園に)

通称タコ公園|こと中央児童遊園(提供:宇栄原団地自治会)



僕が団地に引っ越した昭和49年ごろも周りは畑しかなかったねえ。団地ができた後に、周辺にもお店とかアパートが増えていったんだよ。

宇栄原団地自治会
前花会長

沖縄唯一の『マンモス団地』(当時)

復帰前・アメリカ世の1964年に建設がスタート

本格的に建設が始まった1964年は沖縄戦から19年後、日本復帰の8年前という年。アメリカ世の沖縄では、車は右側通行、通過はドルが使われていました。1964年は東京オリンピックが開催された年。第二次世界大戦で敗戦国となった日本でオリンピックができるまでに復興し、さあこれから!という熱を帯びた、そんな時代に宇栄原団地の建設がスタートしたのです。

背景に戦後の住宅難

当時の那覇市には沖縄戦や基地建設によって住む場所を失った人や仕事を求める人が本島北部や離島から押し寄せ、住宅不足が深刻でした。こうした住宅問題解決のため、那覇市内の各地で市営住宅(団地)が建設されました。

何も無い原っぱから『マンモス団地』に

元は吹切原(フッチリバル)という原っぱを切り開き建設された宇栄原団地。完成時には、45棟、1,004戸、およそ4,000人を収容する規模になりました。当時那覇市内にあった5つの団地(若狭、安謝、議名、久場川、宇栄原)の中で最大規模となり『マンモス団地』と呼ばれ脚光を浴びました。

左:1965年10月(沖縄県公文書館所蔵)右:1972年前後?(写真撮影:新崎善晴氏/親族提供)



左上:建設中の宇栄原団地。まだ周りには何も無い(提供:那覇市歴史博物館) 右上:吹切原(フッチリバル)という原っぱを切り開いて団地の建設が始まった(1964年2月発行 那覇市『市民の友 第162号』より) 右下:団地の建設が始まった年には東京オリンピックが開催。1964年9月 東京オリンピック聖火リレー 小祿沿道の様子(沖縄県公文書館所蔵)

子どもがたくさんいる世帯も多かったから、7人とか10人で住んでるところもあったはずよ。



宇栄原団地自治会 前花会長

家賃はドル

第1期完成(1965年4月)時の家賃はドル。第1種(12坪型2DK):13.21ドル(円換算/約4,800円) 第2種(9坪型2DK):9.35ドル(円換算/約3,400円)(※当時1ドル=360円の固定相場) 1960年代の大卒初任給60~70ドル(21,600~25,200円)の時代。生活に困っている世帯のために建てられたとはいえ、誰でも入れるほど安いわけではなかったようです。2DKは4人家族向けに、そして後から作られた3DKは5人家族向けに設計されましたが、子どもがたくさんいる家庭も多かったそうです。

水洗トイレ、シャワー、ダストシュート。当時最先端の設備

「風呂なし・トイレは共同」といった下宿もまだまだ多かった時代に、各戸に水洗トイレ、シャワー、ベランダ付きで庶民の憧れに。部屋は文化的な生活が営めるよう合理的に設計され、キッチンも窓辺で明るく清潔。主婦が働きやすくてきていました。またベランダにはダストシュートがあり、そこにゴミを入れると1階の集積場までゴミが落ちる仕組みになっていたそうです。



文化的な生活が営めるよう合理的に設計された部屋。オキナワグラフ 1967年6月号より(沖縄県公文書館所蔵)

水洗トイレにシャワー。キッチンは窓辺で明るく主婦が働きやすくてきていた。オキナワグラフ 1967年6月号より(沖縄県公文書館所蔵)

『団地族』と呼ばれ、あこがれの住まいに

この頃、本土では団地の建設が進み、団地に住み『三種の神器(テレビ・洗濯機・冷蔵庫)』を買い揃え文化的に暮らす人が増えました。そんな彼らに対する憧れから『団地族』という言葉が生まれブームとなっていました。本土のような高級な暮らしとはいかなかったようですが、宇栄原市営住宅も当時最先端の設備が整っており、周囲からうらやましがられる『あこがれの住まい』となり、1967年(S42)の第3次入居募集の競争率は3.4倍にもなりました。

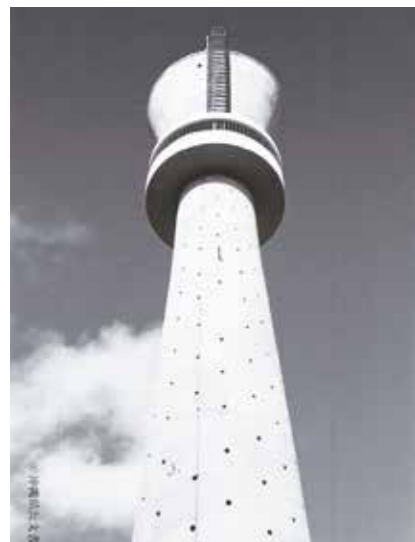


競争率3.4倍!入居希望者でこった送す住宅課窓口(1967年3月発行 那覇市『市民の友 第198号』より)

宇栄原団地自治会前花会長

団地内に銭湯があったよ。入浴料は確か、10セントとか15セントくらいだったかなあ。部屋にシャワーは付いてたけど、昔はお湯が出なかったわけさ笑。でも毎日銭湯に行くのもお金が大変だから、銭湯に行かない日は冷たいシャワーを浴びていたよー笑

団地のランドマーク『バル給』



団地完成時から全1,004戸に水を供給し続けてきた給水塔で愛称『バル給(ウエバルの給水塔の意)』。周囲を見渡す展望台機能とユニークなデザインはどこかノスタルジックな佇まいで、団地のシンボリックな存在です。(建設当時は資材が乏しい時代。胴体にはバナナの幹で開けられたという多数の穴が一換気とデザイン性を兼ねているそう)時代の変化で給水塔の役目も終わり、また老朽化もあり、取り壊すことになっています。寂しいですね。

ファンクラブも

バル給に魅せられたメンバーによる『バル給ファンクラブ』があるほど愛されています!ファンクラブのfacebookでは、ある日のバル給の様子が投稿されています。

バル給ファンクラブフェイスブック



宇栄原公設市場

8つあった 那覇市公設市場の一つ

1967年2月に開設。8つあった那覇市公設市場の一つで、牧志(衣料・雑貨、第一、第二)、辻、東、田原の各公設市場の次に開設されたと思われます。

団地の暮らしを支える“マーケット”

開設当時は、薬局、鮮魚、精肉、美容美容、雑貨(日用品、衣類、文房具、食糧)などあわせて16店舗が入居し、郵便局、管理事務所も隣接していました。当時は団地周辺にはお店がなく、住民の生活を支えるマーケットとして賑わっていたことでしょう。50年以上の歴史の中では様々なお店が営業しており、入居者が営む洋裁店や、お食事処などもあったようです。

上:左手が宇栄原公設市場。1968年1月(沖縄県公文書館所蔵) 下:2022年3月

(出典『那覇市公設市場の概要』)



通った人も多いはず 『駄菓子屋タイガー』

50年以上営業してきた、公設市場最後の店『駄菓子屋タイガー』。市場開設当初はおそらく郵便局だった場所。「懐かしいー!」と思う方も多いのでは?

2021年9月

樹齢60年? 大きなでいご

上:1994年 下:2023年

公設市場と自治会事務所の建物裏にある広場(みどり公園)には大きな大きなでいご。雄大な存在感で、長い間 団地に暮らす人々を見守ってきました。以前は敷地内のあちこちででいごがあったそうですが、建物の建替えに伴い伐採され、残っている最後の一本。けれどこのエリアも大きな広場へと生まれ変わるため、伐採されてしまうそうです…。

宇栄原団地自治会前花会長

建設当初に植えられたはずだが樹齢60年前後じゃないかな。こんな大きなでいご、なかなか無いはず。もうすぐ満開に咲くはずだけど、今年が見納めになるのかなあ。

団地自治会と様々な行事

左:初めての団地まつり 1967年8月発行 那覇市『市民の友 第203号』より 右:2013年8月の団地祭り

これからの宇栄原団地とその周辺

2023年3月現在第6期建替工事中で、あと2棟の建設を予定しているそうです。建替が完了した棟は近代的な団地へと生まれ変わっており、新しい生活がスタートしています。建設当初45棟あった団地は最終的に8棟に集約されることになり、空いた土地は、民間活用ゾーンとなる予定。どう活用するか、は検討されている最中だそうです。古い団地と共に時代を過ごした周辺の建物も老朽化による建替のタイミングを迎えており、これからこの地域全体も新しいまちへと変わっていくことでしょう。次の時代へと変化しながら繋がっていく宇栄原団地とその周辺地域の動向を楽しみに見守りたいですね。

祭りなど行事も盛んだった

1967年8月に開催された初めての団地まつりは、隣人さえよくわからないという団地特有の悩みを緩和して豊かな団地生活へ向上させるため団地自治会が中心となり実現されたそうです。これまでに団地まつり、他、地域の野球大会やバレーボール大会に参加したり、最近ではバスツアーなど様々な行事が実施されてきました。琉舞や三線教室などサークル活動もあるそうです。そういった行事を通して皆んなが繋がって、団地全体で一つの家族のようだったのかも知れませんね。こうした活動は今でも行われています。

団地自治会事務所で様々な行事が開催されてきた

宇栄原団地C地区子ども会が小中高校区少年野球大会で優勝(1982年)

近代的な団地へ



Webでも 宇栄原団地ヒストリー



vol.1『生まれ変わる宇栄原団地』



vol.2『マンモス団地の建設』



vol.3『団地生活は庶民の憧れ(憧れの団地族)』



宇栄原団地ヒストリー YouTube動画